

## 地域とともにある学校におけるカリキュラム・マネジメント

—志高く生きる児童の育成を目指して—

\* 山口 千花, \*\* 本図 愛実, \*\* 三谷 高史, \*\* 齋藤 百合

Curriculum Management in A School Working with the Community  
– Aiming to Develop Children who Live with High Aspirations –

YAMAGUCHI Chika, HONZU Manami, MITANI Takashi and SAITO Yuri

### 要 旨

本研究の目的は、地域とのつながりを活かして教員が協働でカリキュラム・マネジメントを行っていくことが、児童の学習や地域の捉えにどのような効果があるのかを検証することである。第一著者がX校の教員と協働して、令和3年度から4年度にかけての総合的な学習の時間における取組の評価・改善を行った。それを踏まえて総合的な学習の時間のカリキュラムを改編し、令和5年度から6年度にかけて実践を試みた。改編後も改善を加えながらの実践ではあるが、その効果を以下の2点にまとめることができる。第一に、全国学力・学習状況調査の経年比較から、児童が総合的な学習の時間における探究的な学習を意識するようになったことが読み取れた点である。第二に、教員が児童の思考の流れや思いに気付いた段階で年間指導計画を見直し、児童の思考に添った学習を進める姿が見取れたことである。

**Key words**：地域協働，総合的な学習の時間，地域資源，地域人材，教員の協働

### はじめに

近年、急速な社会の変化に伴い、学校と地域を取り巻く課題が複雑化、多様化している。学校では、いじめや不登校児童生徒、特別な配慮を要する児童生徒の増加など、多様な児童生徒及び保護者への対応が必要な状況となっている。

第一著者の所属するX校においても例外ではなく、毎日の学習や生活に課題を抱える児童が複数在籍している。学級によっては全体的に落ち着かない状況が見られ、学校全体で協働しながら対応していくこともある。X校は、一学年一学級の小規模校であり、学年の枠を超えて学校全体でカリキュラム・マネジメントを行っていく必要があると考える。

その際、地域社会との連携や協働を欠くことはできない。小学校学習指導要領（平成29年告示）では、カリキュラム・マネジメントの趣旨として、「社会に開かれた教育課程」の理念の実現に向けて、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むよう、地域と連携・協働しながら一体となって、児童の成長を支えていくことを目指すものとしている。

以上のことを踏まえ第一著者が、現在所属している学校で、「地域とともにある学校」の視点と、教員の協働によるカリキュラム・マネジメントの二つの視点を重視し、児童が地域の課題と向き合い協働して課題を解決しようとする態度の育成を試みた実践である。

\* 宮城教育大学教職大学院第16期生

\*\* 宮城教育大学教職大学院

第一著者は令和4年度まで2年間X校で地域連携担当であった。令和5年度からは教職大学院に在学している。令和5年度は月に一回程度、令和6年度は週に一回の頻度で所属のX校へ行き、総合的な学習の時間（以下、「総合」）を軸として、校長のリーダーシップの下、第一著者が地域連携担当及び各担任と協働し、学校及び児童と地域とのつながり直しを図った。

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説の総則編では、カリキュラム・マネジメントの充実のためには、特に教育の内容等を教科横断的な視点で組み立てていくこと、評価してその改善を行っていくこと、人的又は物的な体制を確保することの3つの側面が必要であると示されている。これらは教育課程に基づき組織的かつ計画的に取り組むことが不可欠であり、学校全体で連携・協働しながらPDCAサイクルに則って取り組んでいくことが大切である。X校の学校経営推進プランの重点事項で示されている協働実践の推進にあるように、学校全体での連携・協働を活かしながらカリキュラム・マネジメントに取り組んでいく必要がある。本研究では、その概要、成果、課題などについて検討する。

## 1. 総合的な学習の時間を中心とするカリキュラム・マネジメントの経緯

X校では、毎年、年度末に2年生以上が一堂に会して総合の成果発表会を行っている。令和3年度末の成果発表会を参観した、第一著者を含める担任外の教員間で「児童は自ら考え、表現しているのだろうか」という疑問が生じた。発表内容が体験学習や地域人材の講話を整理してまとめた内容にとどまり、児童が自分の考えを整理して、それを基に分析してまとめるといった取組が不十分であった。

6年担任と特別支援学級担任にこれまでの学習の進め方や総合の年間指導計画について尋ねたところ、「進め方に迷いがあった」「体験活動の活かし方が見えていない」などの返答があった。どちらも若手教員だが、実施後の行事反省でも同様の意見が出されたことから、経験の有無にかかわらず迷いや不安があるまま進めていたのではないかと感じた。このことから、地域とのつながりを活かした体験活動が探究的な学習へと発展するように効果的に年間指導計画へ位置付けることや、

最終ゴールを見据えて探究的な学習を的確に積み重ねていくことが必要であると考えた。

そこで、当時、地域連携担当だった第一著者と総合担当が、校長のリーダーシップの下で協働し、令和4年度に総合の年間指導計画の見直しを行うことにした。この見直しでは、令和5年度からの実施を見据え、令和4年度までの単元計画の備考欄へ記入された振り返り事項の点検や各担任からの聞き取りを基にして、各学年のテーマとなる大きな柱と流れを再検討することにした。以下に、カリキュラム改善について述べる。表1は、令和4年度から6年度までのカリキュラム・マネジメントとしての取組を表したものである。表2は、令和4年度のカリキュラム改善を生かして作成した全体計画からの抜粋であり、令和5年度から運用している。4年生で実施した「干潟調査」などの新たな取組は、令和7年度に向け、年間指導計画に反映させていく予定である。

表1：R4からR6までのカリキュラム・マネジメントとしての取組

	時期	P	D	C	A
令和4年度	5月				【2. (1)】 教員の協働による取組のスタート ・全職員による共通理解 ・改訂に向けた流れの確認
	11月	【2. (2)】 総合担当との打合せ ・改訂までの流れの確認 ・各担任への聞き取り調査			
	1月   3月	【2. (5)】 総合カリキュラム改編 ・身に付けさせたい資質・能力の決定 ・学習内容と系統性の検討		【2. (3)】 各活動の振り返りと共有 ・「地域人材及び教職員による評価」分析(地域と連携しながら行う教育活動)	【2. (4)】 教育計画作成部会 ・身に付けさせたい資質・能力の検討 ・各学年の学習活動の見直し
新カリキュラムの開始					
令和5年度	5月		・カリキュラム変更点の確認 ・新カリキュラムの開始 ・講話「ラムサール条約」5年生(地域人材活用)		
	6月		【3. (3)－①】6年生 「Y町の魅力を調査しよう」 ・Y町の歴史講話(地域人材活用) ・実施後の振り返りと評価		
	7月			【2. (6)】 地域と連携しながら行う教育活動に関する、教員の質問紙調査 ・調査内容の共有	
	8月			【2. (7)】 地域人材への聞き取り調査内容の共有	
	9月		【3. (2)－①】5年生 社会科「くらしを支える食料生産」との関連(地域人材活用) ・総合での実施から社会科での実施へ変更と計画の修正 ・実施後の振り返りと評価		
			・講話・見学「Y杉について知ろう」 5・6年生(地域人材活用) ・移行期間のため二学年で実施 ・実施後の振り返りと評価		
	11月		【3. (3)－②】6年生 「Y町の魅力を調査しよう」 町づくりの講話(地域人材活用) ・町鳥「イヌワシ」を例にした町づくり ・実施後の振り返りと評価		
			・見学「Y町311メモリアル」 5・6年生(町の施設活用) ・移行期間のため二学年で実施		
	1月				【2. (8)】 各活動後の振り返りと共有 ・「地域人材及び教職員による評価」分析
	2月	・「自分にできる防災計画」における地域人材の活用 5年生(学校閉鎖のため実施なし)	・総合的な学習の時間成果発表会 2年生以上での相互参観		【2. (9)】新カリキュラム実施後の振り返りと次年度に向けて
	3月		【3. (3)－③】6年生 「町の魅力を伝えよう」 地域課題に対する自分たちの取組の考えを、町役場フリースペースで地域住民へ発信 ・児童アンケート実施、分析		
令和6年度		・今年度スタートに向けて職員の実態調査 児童アンケートの検討と実施、分析	【3. (1)－①】4年生 「かがやくY湾」干潟調査 干潟を新たな学習資源として活用		
			・講話「Y町の歴史」6年生(地域人材活用)		
通年				【4(1)～(4)】 各種アンケート調査	

※着色セルは、本文記述項目（緑…4年生、黄…5年生、青…6年生）

表2：X校の総合的な学習の時間の全体計画（抜粋）

【X校 総合的な学習の時間の目標】					
◎探究的な見方・考え方を働かせ、地域の人、もの、ことに関わる総合的な学習の時間をととして、目的や根拠を明らかにしながら課題を解決し、自己の生き方を考えることができるようにするために、以下の資質・能力を育成する。					
学年	3	4	5	6	
学年の目標	地域の方が大切にしているT山のよさが分かり、そのよさを守り、残していくために自分にできることを考え実践しようとする心情を育む。	X湾沿岸の人々の暮らしに目を向け、海の恩恵を受けて人を含む多くの生き物の命が育まれていることを知る。 海の環境を守るために、自分たちにできることを考え実践しようとする。	地域の自然環境を守り、活かし、未来につなげる人々の努力や工夫に気付くと共に、環境の変化という課題を抱えていることを理解する。 環境を守るために、自分たちにできることを考え実践しようとする心情を育む。	ふるさとY町のよさが分かり、それらを守り、活かし、発展させるために自分にできることを考え実践しようとする心情を育む。	
単元名(時数)	ふるさとのみりよくを伝えよう① 「大すき！T山」(45)	ふるさとのみりよくを伝えよう② 「かがやくX湾」(45)	豊かな環境を守る・活かす・未来につなげる「わたしたちのSDGs」(45)	魅力がいっぱい！わたしたちの町(65)	
学習活動	1学期	●オリエンテーション(2) 外部講師による講話を聞く ●Y町の化石を調査しよう(6) 化石発掘体験を行う ●探究Ⅰ「春のT山を調査しよう」(11) 外部講師と一緒に調査する 追調査や資料集めをする 伝えたいことをまとめる	●オリエンテーション(3) ワカメの成長についての講話 ●探究Ⅰ「シロウオ漁を体験しよう」(9) シロウオ漁を体験する 振り返りをする 追調査をしてまとめる 発表する	●オリエンテーション(1) ●探究Ⅰ「町の環境について調査しよう」(6) 外部講師によるラムサール条約についての講話 分かったことをまとめ交流する 学習課題を設定する ●探究Ⅱ「海が抱える課題を探る」(14)※野外活動との関連 野外活動での体験活動 まとめの活動を行う 町の環境課題を確かめる	●オリエンテーション(2) ●探究Ⅰ<物・こと> 「Y町の魅力を調査しよう」(10) 外部講師による町の歴史についての講話 学習課題を設定する グループごとに探究する 魅力について話し合う ●探究Ⅱ<物・こと> 「Y町の魅力を調査しよう」(10) ●探究Ⅲ<ひと> 「Y町の魅力を調査しよう」(10)
	2学期	●探究Ⅱ「秋のT山を調査しよう」(8) 外部講師と調査し春と比較する 追調査し資料を集める 事柄をまとめて発表する	●探究Ⅱ「ワカメ養殖から海の環境を考えよう」(16) ワカメの種はさみ体験をする 振り返りとまとめをする 学習課題を設定する 調査してまとめる 発表する 助言を基に修正する	●探究Ⅲ「山が抱える課題を探る」(11) 林業について事前調査する 外部講師による講話と山林調査 調査報告書の作成と交流 町の環境課題を確かめる	●探究Ⅳ「会津の魅力を探ろう」(11)※修学旅行との関連 会津のよさについて話し合う Y町の課題解決のために会津から学ぶことについて話し合う
	3学期	●探究Ⅲ「T山のみりよくを伝えよう」(18) T山との関わりを考え調査する 情報と資料を整理する 伝えたいことをまとめる 発表する 振り返りをSDGsの視点で広げる	●探究Ⅲ「海のみりよくを伝えよう」(17) X湾の魅力を考える X湾の問題点をまとめる 自分たちにできることを考える 魅力・問題点・できることについてまとめる 発表する SDGsの視点で広げる	●探究Ⅳ「環境を守る・活かす・未来につなげる『わたしたちのSDGs』」(13) 「わたしたちのSDGs宣言」作成 内容を吟味する 発表する 振り返りをする	●探究Ⅴ「町の魅力を伝えよう」(22) 伝えたい魅力について話し合い、構成を考える 資料を収集する パワーポイント等を活用しまとめる 発表する SDGsの視点で自分にできることを考える
	防災領域	津波から自分の命を守る 「わが家のひなん」(20) ●オリエンテーション(3) ●探究Ⅰ「わが家のひなんを調べよう」(7) ●探究Ⅱ「わが家のひなんを考えよう」(10)	津波からみんなの命を守る 「防災マップを作ろう」(20) ●オリエンテーション(2) ●探究Ⅰ(情報収集)(6) ●探究Ⅱ(整理・分析、まとめ・表現)(12)	津波から未来を守る 「津波に負けない町づくり」(20) ●オリエンテーション(4) 311メモリアルと震災復興祈念公園を見学する ●探究「津波に負けない町づくり」(16)	
	情報領域	情報機器を活用しよう(5)			

## 2. カリキュラム・マネジメントの展開

### (1) 教員の協働による取組のスタート

協働による取組を進めるには、目的と目標を明確にして全員が同じ方向に向かうための共通理解が欠かせない。そのため、取組の目的である学校教育目標の具現化に向けて、総合の改善に向けた内容の見直しを目標とすることを全教員で確認した。

令和4年5月の職員会議の際、ふるさとのよさを理

解し、地域の一員として自分たちにできることを考えること、あるいは、自分の生き方を考えることが、「志」の育成、「未来志向のふるさと教育」の推進につながることを教員間で再確認した。校長からは、令和5年度実施に向けた総合のカリキュラムの改訂についての説明があった。総合の目標達成に向け、所属校の課題となっている、各学年における総合のゴールを意識して体験活動や講話を位置付けることに加え、体験学習や一般的な知識などを学習の入口としながら課題を設

定させ探究的な学習を充実させることを教員で共通理解した。令和4年度においては、旧カリキュラムで実施しながら、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」の探究的な学習の過程を展開し、総合の時間において探究の力を身に付けさせ、各教科に反映させられるよう意識して指導していくことも確認した。

## （2）総合担当との打合せ

令和4年11月、総合担当と打合せをし、改訂までの大まかな流れを確認した。6年生の「町の魅力を伝えよう」をゴールとし、各担任と協働しながら、そこに向けた児童に身に付けさせたい資質・能力を明確にする。次に、学年の学習テーマの再検討と、これまで学習資源としてきた地域資源の見直しを行うことにした。ここで各担任からの聞き取り内容を活かしていくわけだが、苦慮した点が2点ある。

一つ目は、計画の緻密度である。当時の担任は全員がX校勤務歴3年未満であったことから、地域のことを熟知していないという理由により、詳細な指導計画を望む声が多かった。一方で、他校での総合の指導経験がある担任からは、児童の思考の流れに寄り添いながら学習を進めることを考え、学習の幅をもたせられるよう大きな流れの計画にしておきたいという声が上がった。これらの意見を考慮すると、児童が課題によって活動を選択できるようにするなど、計画に幅を持たせることが求められたため、体験活動を「探究的な学習の入口としての活動」として共有できるように位置付けた。その後は課題に沿って学習を進めていく。そのため、年間指導計画には、「例」としての活動を具体的に提示したり、協力依頼の欄を設けて協力先を選択したりできるようにすることで緻密性を補った。併せて、協力を得られる地域人材や事業所などの整備、公民館などへの相談体制を確立するなどの土台作りも進めた。

二つ目は、これまで作り上げてきた地域人材や事業所とのつながりへの配慮である。学習内容を見直す上で、これまでつながりを築いてきた地域人材との関係が揺らいでしまうことが憂慮された。体験活動と探究的な学習を効果的につなげるため、学習のねらいと児童に身に付けさせたい資質・能力を明確化させることが大切であると考えた。

## （3）各活動の振り返りと共有

令和4年度の活動に関わった教員と地域人材による振り返りの内容を紙面により教員間で共有し、実態を確認した。質問事項は次の3項目である。

ア)講師の想いが児童に伝わるように配慮された計画となっていたか。

イ)活動時間は適切だったか。

ウ)打合せや事前連絡など、連携の取り方は適切だったか。

ア)について、地域人材からは、学校での事前学習を行うことで児童の興味・関心が高まり、体験活動や探究的な学習を効果的に行うことができたことや、事前打合せを行うことで役割や流れを明確にして学習を実施できたことなどの成果が挙げられた。教員からは、地域人材からの児童への投げ掛けが次の課題や探究のきっかけになったことや、地域人材による講話と体験の組み合わせが効果的であったことなどが挙げられた。

イ)とウ)については課題の面が多く、両者において、講話時間が足りなかったことや打合せ時期が遅かったことなどが挙げられた。これらの課題については、担任と地域人材とで講話などのねらいを共有することや、実施までを見通した余裕のある打合せ日程とすることで改善できることを教員間で確認し、次年度に活かすことにした。

これらの振り返りから、年間指導計画に事前学習を位置付けることや、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」という探究的な学習の過程を工夫すること、学習の進め方に応じて地域人材と複数回において関わられるように配慮することについて総合担当と確認し、計画に反映させることとした。

## （4）教育計画作成部会

令和5年1月、総合担当を中心とする部会で、各学年において身に付けさせたい資質・能力を確かめながら、学習活動を再考した(表3)。探究的な学習を深められるよう学習活動を焦点化しつつ、学年が上がるにつれて地域を広い視野で捉えられるようにした。この段階では、学習資源や地域人材などとのこれまでのつながりを活かす形で話し合いを進めた。

従来、防災領域は4年生のみに位置付けられていたが、学習を展開させながら積み重ねることを目的に3年生から5年生にわたって位置付け直し、学校教育目



標である「命とふるさとを大切にし、『志』高く生きる児童の育成」を達成すべく、系統的に防災学習に取り組めるようなカリキュラムへの改善を図った。

表3：各学年の学習活動の見直し

学年	令和4年度	令和5年度	
3	T山での探検 X川でのシロウオ漁体験 キャップハンディ体験	T山での探検 化石発掘体験	防災 領域
4	X湾でのワカメ養殖体験 化石発掘体験	X湾でのワカメ養殖体験 X川でのシロウオ漁体験	
5	町の産業（農業、水産加工場）の見学	ラムサール条約の聴講 Y杉の見学	
6	※探究内容に応じて決定	※探究内容に応じて決定	

### （5）総合カリキュラム改編

令和5年1月から2月にかけて、身に付けさせたい資質・能力を基に、4年間の系統性を持たせるよう、校長の指導の下、第一著者と総合担当で年間指導計画の最終調整を行った。

3年生はこれまで山と川及び福祉の学習から、山に特化した環境領域に絞り、4年生は海と防災領域の学習から、地域の海と川の豊かさについて考える学習に組み換え、5年生は水産加工や農業などの産業の学習から、海の環境と林業の学習に変更した（表4）。学習内容を焦点化することで学習の深まりを目指しつつ、5年生では環境について広く捉え、6年生では、3年間の学びの総まとめとして町のよさを活かした町づくりについて提案することにつなげられると考えた。加えて、全ての学年にSDGsの視点を取り入れ、4年間の学びに持たせる系統性の一つとした。

表4：R4からR5への学習内容の変更

学年	令和4年度 単元名	令和5年度 仮単元名	
		環境領域	防災領域
3	Z地区のよさとやさしさを知ろう ＜川の流れ＞＜福祉＞	ふるさとのみりよくを伝えよう① 「大すき！T山」	津波から自分の命を守る「わが家の避難」
4	Z地区のよさと安全を知ろう 「わが家の避難」 ＜海の流れ＞＜福祉＞	ふるさとのみりよくを伝えよう② 「かがやくX湾」	津波からみんなの命を守る 「防災マップを作ろう」
5	Y町のよさと恵みを知ろう ＜里の流れ＞＜産業＞	豊かな環境を守る・生かす・未来につなげる 「わたしたちのSDGs」	津波から未来を守る 「津波に負けない町づくり」
6	Y町の未来を創り出そう （3年間の総括、発展）	魅力がいっぱい！わたしたちのふるさとY町 「わたしたちの町づくり計画」	

年間指導計画を基にして単元ごとの学習の流れを示したものが単元計画であるが、これまで実施して累積してきた反省事項を、単元計画を見直す際の参考の一つとした。総合担当と協働し、今後行うに当たり改善点となる、実施時期や時間の増減、体験活動を実施す

るまでの流れ、新たに組み込んだことなどを反映させるようにした。

### （6）地域と連携しながら行う教育活動に関する、教員の質問紙調査

令和5年7月、地域と連携しながら行う教育活動について教員の意識調査を行った。回答対象者は9名、回答率は66%である。

質問「活動のねらいに対して、時数は十分だと思うか」に対しては、10段階評価で平均8.2であり、時数に大きな問題はなく、指導計画の範囲で実施できていると感じていることが分かった。

質問「地域と連携しながら行う教育活動を通して児童に付けたい力はどんな力か」では、「地域のことを知り、地域で生きていく力」「郷土に興味関心を持ち、自分の地域を大切にする力」「探究力、表現力、コミュニケーション力、連携する力」「様々なことに関心を持ち、目を向けて自力解決する力」「地域のよさに気付く力、発信する力」などの回答があった。児童の未来において活かされる力についての記述が多かったことから、「未来の創り手」としての力と捉える傾向にあると考える。

質問「地域が学校に関わることで、学校の教育が充実すると思うか」に対しては、10段階で平均8.6であり、ほとんどの教員が地域との関わりを肯定的に捉えている。充実すると答えた理由は、「地域人材の持つ専門性を活かした学習ができる」「小学校では様々な教科において、自分の地域を具体として学びを展開するから」「幅広い知識と豊かな経験を有しているから」などである。地域人材が有する専門的な知識など、地域が学校に関わることへの効果を期待している教員が多いと考える。

質問「地域と連携しながら行う教育活動は、児童の成長に有効だと思うか」では、10段階評価で平均8.2であった。その理由は、「地域のために自分の力が活かせる、役立ったという経験をさせることができる」「学習時のみならず、交流をきっかけとして長期にわたって見守っていただいている」「学校、家庭以外の関わりにより、児童が学ぶことが増えるから」「教員の負担軽減が進めば児童と関わる時間が増えたり、地域と児童の情報を共有しながら児童を育てたりすることができるから」などであった。

教員が何に負担を感じているかを確かめ改善につなげるため、地域と連携しながら行う教育活動に対する負担感について、当てはまる項目を選択してもらった（複数選択可）。負担であると感じていることは、「児童からのお礼の手紙の作成・とりまとめ」（6人）、「段取りなどの事前準備」（5人）や、「事前打合せ」（4人）などであり、活動そのものではなく、活動に関わる事前事後の取組であった。この負担感は教員が活動の成果を実感することが軽減につながると考え、校長と第一著者で協議し、地域人材との事前打合せで活動のねらいを明確にすることを確認した。事後のお礼については、児童と地域が学習を通してつながることも重視し、児童の手紙に代えて、学習過程におけるまとめの成果物を送るなどして気持ちを伝えてもよいことを確認した。

#### （7）地域人材への聞き取り調査内容の共有

令和5年8月、学習に関わる地域人材及び登下校見守り隊の計7名に、地域と連携しながら行う教育活動に関する聞き取り調査を行った。質問「講師をしてよかったと思うことはあるか」については、「町には自慢できる大切なものがあることを小学生のうちから知ってもらえること」「児童を通して親にも広がっていることを、地域の人の声から実感している」「たくさん児童と触れ合うことができ、つながりが増えていくこと」「児童に知識や思いを伝えるためにとことん調べることで、自分自身の勉強の機会になっていること」などの回答があり、講師をしてよかったと感じていることが分かった。

質問「X校の児童に身に付けさせたいと思う力はどうな力か」については、「他地域のことも知り、その違いに気付いたり考えたりする力」「体験することから学びにつなげる力」「失敗を恐れずに挑戦して自主性を身に付けてほしい。それが学びにつながり自信になる」などの回答があった。視野を広げて地元に戻り、活躍してほしいと願う地域人材の方が多かった。

#### （8）各活動後の振り返りと共有

令和5年度の活動に関わった教員と地域人材による振り返りの内容を全体で共有した。質問項目は令和4年度と同じものである。

ア) については、令和4年度のY町の杉の講話にお

いて、「実際に杉林に行ってみたい」という児童の声があり、令和5年度は5・6年生が山林見学を行った。講師である地域人材は「現地で話すことができ、十分に林業の話を伝えることができた」と振り返った。一方、昔の暮らしについての講話の振り返りでは、講話だけでなく、各家庭においても祖父母などから、自分の家庭での暮らしについて機会を作って聞くことも大切であると、地域人材より助言を受けた。身の回りにも伝える人がいて、伝える人にも義務があるという趣旨であった。

イ) については、令和4年度の振り返りで教員と地域人材の両者から多く出された「時間が足りなかった」という記述が減った。令和4年度の取組を改善し、学習のねらいを明確にして、打合せにおいて地域人材と共有することを確認したり、地域人材への質問事項を事前に伝えたりすることで学習内容を焦点化するようにしてきた。また、より充実させたい活動については、時間を増やしたり、他の活動と関連付けたりしたことで、活動時間の不足が解消されたと考えられる。炎天下での活動となったものについては、今後も予想されることから、実施時期を見直す方向で検討をしていく。

ウ) に関しては、「電話での打合せだったが円滑にできた」という内容と、「対面での打合せを通して、学び方を確かめたい」という内容があった。振り返り内容からも、事前の打合せが活動の充実度を左右することが読み取れる。しかし、時期によっては行事と重なり、活動直前になったり、電話で済ませてしまったりすることがあるため、地域連携担当が余裕を持って担任に声を掛け、実施までを見通した打合せができるようにしていくことが大切だと考える。対面か否かの実施形態ではなく、地域人材との連携を密にして、十分に意思疎通ができるよりよい打合せの方法をとることが、活動の充実につながると考える。

全体的に見ると、令和4年度までの課題点を校内や学年間で引き継いできたことで、充実した活動になっていることや、児童の関心の高まりによる学習への効果を感じていることがうかがえる。令和5年度の活動で課題として出されたことを改善策と共に、学年ごとに次年度へ引き継いだ。

### (9) 新カリキュラム実施後の振り返りと次年度に向けて

令和6年1月、教育計画作成部会（総合）における話し合いを行った。単元計画に書き加えた振り返り事項を基に、令和5年度に実施した生活科や総合などにおける校外学習や体験活動を振り返ると、残暑の時期に屋外での活動が位置付けられていて体調不良者が出たり、学期末と重なったことで円滑な評価につなげられなかったりしたという反省が出された。そのため、活動のねらいを明確にし、熱中症リスクの低い時期に設定することや、計画的に評価を行って次に活かせるよう見通しを持たせた計画を立てることを確認した。

## 3. 新カリキュラムの実施と改善

ここでは、令和5年度からの新カリキュラムを実施する過程において改善した点と、児童の思考に添って新たに取り組んだ点について述べる。

### (1) 4年生の事例

#### ① 「かがやくX湾」干潟調査

#### 【新たな取組】

令和6年6月、新たな取組としての、身近な地域資源の一つである「干潟」での調査を参与観察した。この活動は、新たな学習資源となり得る干潟を活用したもので、児童の興味・関心を高めることと課題設定に活かすことをねらいとした。

Y町自然環境活用センター（以下「ネイチャーセンター」）に依頼している、ワカメ養殖についての講話の打合せの際、学校の目の前にある干潟で調査をして課題設定に活かしてみようかどうかという、職員からの提案を受けたことがきっかけで、協力を得て行うことになった。

ネイチャーセンターは、平成11年に生物たちの営みを観察し学ぶための施設としてスタートした。Y町の恵まれた自然環境を活用し、町内外の利用者に質の高い環境教育プログラムを提供し、人材育成を図りながら交流人口を増加させ、地域の活動につなげていくという目的の下に「エココレッジ事業」を展開していた。その後、東日本大震災を経て、2020年に再建・開設され、Y町の自然に関する調査・研究・教育・普及活動を行っている。また、Y町の自然を対象とした研究を行う外部研究者の受け入れとその調査・研究活

動の調整なども継続して行っている。

干潟調査は、年間指導計画には載っていない活動であるため今年度の実施を通して、学習資源となり得るか検討することとした。干潟調査に要した時間は、事前指導1時間と実施2時間の計3時間である。事前指導では、ネイチャーセンターの協力を得て、児童は調査の仕方や留意点、想定される生き物などを確かめた。翌日の干潟調査には、ネイチャーセンターから4名、学校から3名、保護者1名が参加した。ネイチャーセンターの職員が複数名いたことで、グループごとに分かれて調査範囲を決め、教員が付き添いながら調査をすることができた。児童は、職員の助言を受けながら、見つけた生き物の雌雄や種類による違いなどを観察した。テッポウエビやスナモグリ、ヒライソガニなど様々な水生生物を見付けることができ、児童は、「こんなにいるとは思わなかった」「自分が知っている以外の生き物もいた」「なぜこんなにいるのだろうか」と振り返った。ネイチャーセンターの職員は、児童が生き物に触れ慣れていないことや、雌雄の見分けがつけられないなどの様子に驚きながらも、干潟調査の継続に意欲的であった。担任においては、「これまではなかった、生き物という新たな視点を得ることができた」と、干潟調査の有用性を実感していた。

干潟調査の前に、児童は探究的な学習の入口として、地域人材によるワカメ養殖と海の豊かさについての講話を聞いていたが、課題設定につなげることは難しかった。しかし、講話から干潟調査へと活動をつないでことで、海への関心を高め、海や生き物に対する実感が伴った課題設定に活かせることから、干潟調査によって探究的な学習へと発展させることができたと考ええる。

学校から徒歩圏内にある干潟で、生き物を実際に見たり触れたりできる有効な活動でもあったことから、今後の学習にどのように活かされるかについても検討していき、年間指導計画に位置付ける方向である。今後、この活動を活かして、町内で干潟調査を行っている近隣の高校の生徒から協力を得て、他の干潟との比較などを通して学習を深められるのではないかと考える。今後も、学校とネイチャーセンターの連携は継続される予定である。



## (2) 5年生の事例

### ① 社会科「くらしを支える食料生産」との関連

#### 【新カリキュラムの実施と改善】

総合における5年生の学習内容の幅が広く、これまで学びを深めることと系統性を持たせることが課題であった。そのため、総合で取り組んでいたネギとキクの栽培農家と水産加工場の調査・見学を、令和5年度から社会科「くらしを支える食料生産」の単元で実施する計画に変更した。

総合「環境を守る・活かす・未来につなげる『わたしたちのSDGs』」の学習過程で、担任はこれら三つの事業所からSDGsの取組について調査ができるのではないかと考え、社会科での調査・見学を活かし、SDGsの視点からの学びを総合に関連付けて学習を進めた。児童は、環境への負荷を少なくするための農業の減量化や紙製マルチの使用などSDGsに関連した取組について学び、これらの学びを活かして「わたしたちのSDGs計画」研究の実践につなげた。社会科の視点だけでなく総合にも関わる学習内容であることから、年間指導計画に関連を明記し、今後も関連を図りながら学びを充実させていく。

## (3) 6年生の事例

令和5年度、新カリキュラムを実施する過程において、活動の取り入れ方を改善したり、新たな活動を位置付けたりしてきた。一つ一つの活動が、学習のゴールである「町の魅力を伝えよう」につながる活動となり、総合における学年目標に向けて、より児童の思いや考えに寄り添った学習活動を展開することができたのではないかと考える。

### ① 「Y町の魅力を調査しよう」

#### Y町の歴史の講話

#### 【新カリキュラムの実施と改善】

令和4年度は、「Y町の歴史」の講話を1単位時間の実施としていたが、知りたい内容に対して時間が短く、講師である地域人材も伝えきれていないという思いを抱いていた。この点を改善するために、令和5年度は2単位時間での計画としたことで、どちらにとっても充実した活動となった。また、導入段階で講話を実施しているが、学習を進める中で再度疑問がわくことも考えられるため、ゆとりを持たせた計画が必要であると考えた。

### ② 「Y町の魅力を調査しよう」

#### 町づくりの講話【新たな取組】

町教育委員会が主催している6年生対象のY町ふるさと学習会で、「イヌワシ」という鳥についての講話を聞く機会があった。児童は、これまであまり聞いたことのないイヌワシが町のシンボルとなる町鳥であったことに驚き、更に詳しく知りたいという思いを持った。

後日、同講師に依頼し、生物多様性を意識した町づくりについて、イヌワシの例を基にした講話を聞く学習を設けた。イヌワシは町鳥に指定されているが、町内には現存していないことから、児童は「現存しないのに町鳥なのか」という疑問を持った。講話を通して児童は、放置林が増えてイヌワシが生息できなくなったことを知り、適切な林業で雇用を増やしたり商品開発を行ったりすると同時に、イヌワシの生息環境を整備していくことの大切さについて考え、環境の維持を目指す町への提案を考えるきっかけとすることができた。

担任は、「児童が町づくりについて考えていく上で、Y町の自然に対する、児童の課題の捉えが見えにくいところであったが、講話をきっかけに問いが生まれてよかった」と振り返った。年間指導計画にはない講話であったが、町づくりに活かせる内容であり、今後も選択肢の一つとして新カリキュラムに位置付ける方向である。

### ③ 「町の魅力を伝えよう」

#### 地域への発信【新たな取組】

令和6年3月、「未来の町づくりへの提案を、町づくりに関わる大人に伝えたい」という児童の思いを受け、町教育委員会と連携し協力を得ながら、町役場フリースペースでの地域へ向けた発信の支援を行った。教育委員会の担当者と担任及び第一著者で打合せを行い、発表場所の確保や場の設定、町役場内への周知などの面で、教育委員会からの協力が得られることを確認した。

単元目標は「ふるさとY町のよさが分かり、それらを守り、活かし、発展させるために自分にできることを考え実践しようとする心情を育む」ことである。児童が地域課題を基に考えた提案内容を、商工観光課や企画課などの町づくりに関わる町職員及び地域住民に発表した。町職員からは「課題を踏まえた具体的な提案だった」ことや「これからは柔軟な考えを大人に伝えてほしい」「大人では思いつかないすばらしい提案

質問 1 : 今回の発表の経験を、 これからの学習に生かしていける と思うか。	
R5. 11月	R6. 3月
中央値・最頻値	中央値・最頻値
6	8

質問 2：未来の Y 町のために何かしてみたいと思うか。	
R5. 11 月	R6. 3 月
中央値・最頻値	中央値・最頻値
6	8

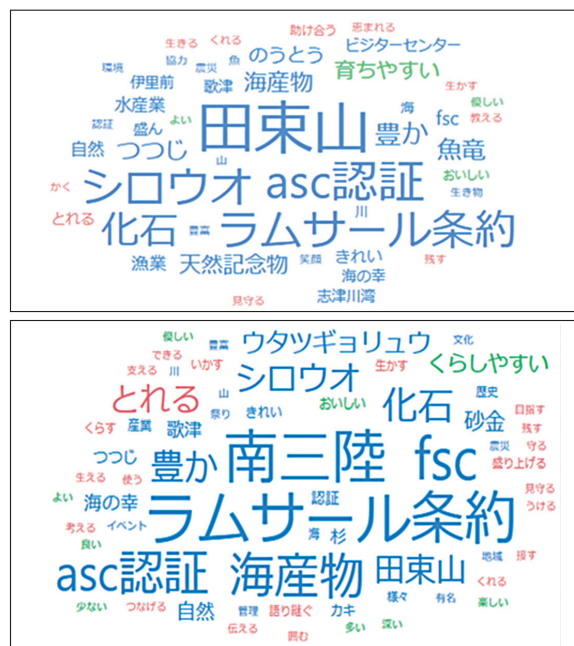
大人からの感想を聞いた児童の振り返りには、「自分たちの提案で未来の町がよくなっていくとよい」「これから町のために頑張りたい」などという、町の未来を見据えた自分の行動に関する記述が多く見られ、学習のねらいを達成させることができたと考える。校内で学習を終結するのではなく、町や地域住民に向けて発信するという新たな視点を得ることができた。

質問3:質問2について、それはどのようなことですか。

町民にほとんど知られていない町鳥の「イヌワシ」のことを、  
たくさんの人に知ってもらおうこと  
今回提案した「防災スタンプラリー」のデザインを考えてみたい。  
Y町のことを、たくさんの人に知らせたい。  
少しでも暮らしやすくなるとよい、人々が暮らしやすくなるように  
考えていく。  
ゴミ拾いなど、ボランティアをしていくこと。

令和4年度、2年生から6年生において調査した「ふるさと のよさ」に対する児童の捉えを、変容の観点から分析した。調査内容は、自分が知っているふるさと のよさを記述するもので、5月と3月における調査の 比較から以下のことが明らかになった。

このように、地域と連携しながら行う教育活動を継続することは、ある一定の効果があると考えられる。特に高学年では、よさを「もの」から、「ひと」がしている「こと」へ目を向けられるようになった。他学年においてもよさの具体的な気付きを促し、最終的に自分事として捉えられるようなカリキュラムを編成することで、よさを実感しふるさとへの愛着につながるのではないかと考えた。図1は6年生における変容を、ユーザーローカル「A Iテキストマイニング」で分析したものである。6年生においては、表記項目の数



– 256 –

のものが増えた。5月には名詞表記だったものが、形容詞や固有名詞を使った表現に変容したことから、より具体的に捉えて表現できるようになったと考えられる。さらに、3月には動詞での表記が増えたことから、町や地域の人たちの様子や取組をよさとして捉える児童が増えたことが分かる。一方で、そのよさの根拠や自分自身とのつながりなどについて考えられるような学習活動を工夫する必要があることが分かった。

## (2)「ふるさとのよさ」アンケートの比較

令和5年6月、2年生から6年生対象に「ふるさとのよさ」アンケートを実施した。その際、ふるさとのよさの捉えが、学習活動を通してどのように変容したかを、令和5年3月の記述内容と比較した。

全体で共通していることは、新しい学年での学習を経て、新たに学んだ地域のことを理解して「よさ」と捉えるようになったことである。2年生においては、「よさ」の捉えが難しく曖昧であったが、1年時と比べて海や山などの自然の様子に目を向けるようになった。3年生ではその変化が顕著で、2年時では友達関係や家族との経験が基になっていたが、3年時では地域へと視野が広がり、地域人材からの学びを地域のよさとして新たに捉えるようになった。6年生においては、5年時には固有名詞が頻出していたのに対し、6年時には、地域の人の様子や行動などにも目を向けるようになった。このように、地域の大人との関わりが、児童が視野を広げるきっかけとなって地域のよさへの気づきにつながることが明らかになった。

## (3)高学年児童の実態分析

令和5年11月と令和6年3月、5年生(17名)と6年生(18名)を対象にアンケート調査を行った。この調査項目は、全国学力・学習状況調査の児童質問調査項目を参照した。

「挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等についての項目」(表8)について、「当てはまる」を4点、「どちらかといえば当てはまる」を3点、「どちらかといえば当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点として合算し、各学年の合計の平均値と最頻値で比較した。5年生の平均値で令和5年11月と令和6年3月を比較すると、28.18ポイントから28.00と、0.18ポイント下回ったものの、最頻値は26から28と2ポイント上回る結果となった。6年生でも同じく

平均値で令和5年11月と令和6年3月を比較すると、26.44ポイントから26.33と、0.11ポイント下回ったものの、最頻値は27から29と2ポイント上回る結果となった。

表8：挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等についての項目

(1) 自分には、よいところがあると思いますか。
(2) 将来の夢や目標を持っていますか。
(3) 難しいことでも、失敗を恐れずに挑戦していますか。
(4) 人が困っているときは、進んで助けていますか。
(5) いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか。
(6) 人の役に立つ人間になりたいと思いますか。
(7) 学校に行くのは楽しいと思いますか。
(8) 地域や社会をよくするために、何かしてみたいと思いますか。

質問「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」の結果を取り出して比較した(表9)。その際、「当てはまる」を4点、「どちらかといえば当てはまる」を3点、「どちらかといえば当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点とした。どちらの学年においても、中央値と最頻値ともに変化がないが、平均値がやや上がる結果となった。児童は、総合において地域の課題を調査し、その課題を解決するために自分たちにできることについて考える学習を進めてきた。探究的な学習の過程を重視してきたことが、自分たちにできる具体的な内容につながる一因となったのではないかと考える。

表9：5年生と6年生の比較

5 年 生	質問「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」		
		R5.11月	R6.3月
	平均値	3.18	3.24
	標準偏差	0.71	0.64
	中央値	3	3
	最頻値	3	3
6 年 生	質問「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」		
		R5.11月	R6.3月
	平均値	2.94	3.06
	標準偏差	0.76	0.62
	中央値	3	3
	最頻値	3	3

「学習に関する興味・関心や授業の理解度等に関する項目」(表10)において、「当てはまる」を4点、「ど



ちらかといえは当てはまる」を3点、「どちらかといえは当てはまらない」を2点、「当てはまらない」を1点として合算し、各学年の合計の平均値と最頻値と比較した。5年生において、令和5年11月と令和6年3月を比較すると、平均値が48.06から47.50となり0.56ポイント下回ったが、中央値は49から50に1ポイント上回り、最頻値は49から52と3ポイント上回る結果となった。6年生では中央値と最頻値ともに47で変化はなかったものの、平均値が45.00から46.59へと1.59ポイント上回った。

表10：学習に関する興味・関心や授業の理解度等に関する項目

(1) 2学期までに受けた授業で、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。
(2) 2学期までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。
(3) 学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていますか。
(4) 総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。
(5) あなたの学級では、学級生活をよくするために学級会で話し合い、互いの意見のよさを生かして解決方法を決めていますか。
(6) 学級活動における学級の話し合いを生かして、今、自分が努力すべきことを決めて取り組んでいますか。
(7) 国語の勉強は好きですか。
(8) 国語の勉強は大切だと思いますか。
(9) 国語の授業の内容はよく分かりますか。
(10) 国語の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役に立つと思いますか。
(11) 算数の勉強は好きですか。
(12) 算数の勉強は大切だと思いますか。
(13) 算数の授業の内容はよく分かりますか。
(14) 算数の授業で学習したことは、将来、社会に出た時に役に立つと思いますか。

#### (4) 児童の実態把握

令和6年6月、2年生から6年生93名にアンケート調査を行った。全体的な傾向として、学年が上がるにつれて肯定的な回答が少なくなる傾向にある。「Y町のいいところを知っているか」の質問で、「当てはまる」と答えた児童は7割弱であるのに対し、「そのいいところを誰かに教えたいと思うか」の質問で「当てはまる」の回答は約5割であった。「普段の生活の中で、地域の人と話したり関わったりすることがあるか」の質問では、「当てはまる」と答えた児童は5割弱であり、残りの5割の児童は学校などにおける限られた関わりになっていることが、この結果からうかがえる。一方で、協働による課題解決や地域人材を活用した学習に関しては6割強の児童が好意的に捉えていた。

「Y町のよいところ」の記述では、総合の時間に学

習する「T山」を中心として、その歴史や植物、海産物や海の生き物などが挙げられた。更に海の環境のよさや自然の豊かさ、地域や人の様子などをよさとして捉えていることが分かった。学年ごとに見ると、2年生では、学校付近の施設や友達の優しさなど、生活科の町探検や学級での経験と思われる内容が見られた。3年生以上では、総合の学習内容が反映され、中学年では、自然の存在をよさとして捉え始め、高学年では、自然の豊かさや人々の様子などもよさとして捉えていることが分かった。

このことから、今後も「知っているいいところをだれかに教えたいくなる」工夫や、協働による課題解決や地域人材を活用した学習を意図的に位置付けていく工夫が必要であると考えられる。

#### おわりに

X校における令和5年度と6年度の全国学力・学習状況調査の児童質問調査の結果を比較した。総合の探究的な学習についての質問事項「総合では、自分で課題を立てて情報を集め整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか。」に対して、令和5年度は「当てはまる16.7%、どちらかといえは当てはまる55.6%」であった回答が、令和6年度は「当てはまる58.8%、どちらかといえは当てはまる41.2%」となった。これは、令和5年度から新カリキュラムで学習したことだけでなく、教員が協働でカリキュラム・マネジメントを行ったことで、探究的な学習に対する教員の意識が向上したことも影響していると考えられる。

総合のカリキュラム再編スタート当初は、単元計画と児童の思考とのずれによる学習展開のしにくさを感じながらも、単元計画に沿って学習を進める傾向にあった。しかし、児童の思考の流れに気付いた段階で、その気付きを再考したり声に出したりして単元計画を見直し、活用できる地域資源や地域人材を自らリサーチしようとする教員の姿が見られるようになってきた。今後、この取組に地域とのつながりも活かしていくことで、児童の探究的な学習が更に充実するものと考えられる。

#### 参考・引用文献



文部科学省（2017）小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総  
則編

高橋純（2019）教育方法とカリキュラム・マネジメント，学文社，  
田村知子（2022）カリキュラムマネジメントの理論と実践，日本標準，  
文部科学省（2017）小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編，  
株式会社東洋館出版社，

